

「身寄りなし」になる自覚 ①

昨年来、家族に頼らずに老後とその先を迎える問題について、国会や省庁、更にはマスコミ報道で「身寄りのない方」「身寄りなし問題」といった表現が使われています。

いったいどれだけの人が、自分自身に「身寄りがない」と当事者意識を持つのでしょうか。少なくとも子供がいれば、「身寄りがない」の範疇に入るとは考えにくいのではないのでしょうか。



しかし、今、子供がいて、将来は子供が面倒を見てくれるだろうと思っても、さまざまな事情によりそれが叶わず、想定外に「身寄りがない」状況になってしまう事例が、次々と報告されてきています。

東京都内で一人暮らしをしている山本恒夫さん（82）は、もともとは妻と娘2人との4人家族でした。不幸なことに次女はまだ25歳のときに亡くなってしまいました。そして10年前には最愛の妻に先立たれてしまいました。

恒夫さんは、自宅を二世帯住宅に改装して長女の家族と暮らすことにしましたが、恒夫さんと長女の夫の折り合いが悪くなり、長女も全面的に夫側についてしまったので、二世帯住宅での同居を解消し、それ以来、恒夫さんは長女家族と連絡を取らなくなりました。その後、長女の家族は夫の仕事の都合で、アメリカに渡って暮らしているそうです。

恒夫さんは、80歳を超えてガンが判明したときも、長女に連絡を取ろうとはしませんでした。周囲の支援者が、いざという時のために長女の連絡先を聞いても、「昔の電話番号しか知らないよ」と、そっけない返事。

もし、具合が悪くなってからある程度の療養機関があれば、その間に、何とか恒夫さんを説得して、長女の連絡先を突き止めることができたかもしれません。しかし恒夫さんは、ある日、連絡なしにデイサービスをお休みしたことから異変を感じたデイサービス職員が警察に連絡して、自宅で亡くなっているところを発見されました。

結局、恒夫さんは数ヶ月経った現在も「引き取り手のないご遺体」のままです。警察や自治体による調査で、法定相続人に娘が1人いることは判明し、国内に住所があれば警察か自治体はその住所を調べて連絡をすることになりますが、国内の最終住所からの転出先が「アメリカ合衆国」では、その先を調べるのは至難の業です。

子供がいても、恒夫さんのように様々な事情が重なり合って、実際に身寄りがない方に起こり得ることと同じ状況に陥ってしまうことがあるのです。

人生において、どんな順番で何が起こるのかは誰にも分かりません。「身寄りなし問題」は決して他人事ではないということを、少しでも多くの方に気づいていただきたいと願っています。

次回も、想定外に「身寄りなし」の状態になってしまった事例のご紹介です。 つづく